

コールリッジの有機的統合

—理性と悟性—

高瀬 彰典

(2000年10月16日受理)

Organic Unity in Coleridge

—Reason and Understanding—

Akinori TAKASE

キーワード：詩，哲学，宗教，想像力，聖書，教育

Key words : Poetry, Philosophy, Religion, Imagination, Bible, Education

(1)

18世紀末から19世紀初頭にかけての英国は、歴史的に見て産業革命以降、都市人口の急増、農村破壊、フランス革命など大きな社会的変動の時代の中であった。政治がこの様な新たな難局に際して、諸問題に如何に対処し抜本的解決を計るかが緊急の課題であった。対仏戦争の影響や都市への人口集中のため、物価は高騰し労働貧民が大量に生まれた。戦争の終結は平和をもたらさず、経済と政治の混乱を招いた。経験主義の啓蒙思想家達は何ら根本的解決策を提示出来ず、不満の大衆を扇動するのみで、実質的には何も改革を行わない状況であった。『俗人説教』や『政治家提要』など一連の著作の中で、貧困者達の堅実で質素な生活を放棄させ、扇動によって人々を破滅へと導くのみだとコールリッジは当時の世相を厳しく糾弾した。戦争中は工場労働者も農民も好景気で潤っていたが、突然終戦を迎えると、英国は予想もしなかった不況に陥ったのである。需要の激減に伴って失業者が激増し、急な財政の引き締めで不況はさらに深刻さを増した。さらに、問題を難しくしたのは、全土に広がった私利私欲の過剰な営利主

義であった。商工業の発達と共に、営利目的の過剰な物欲が社会に弊害を生むに至った。利己的な営利心を押さえるべき真の哲学は存在せず、宗教も全く無力であった。果てしない利益の追求が景気的好転と急落を繰り返し、市場価値が人間も自然も全てを決定するに至った。特に農業の商業化は国家の根底を揺るがし、社会の安定を脅かすものだとコールリッジは警告を発した。産業革命の結果、生活環境は向上したが、都市への人口急増によって、労働者は劣悪な条件で機械の歯車のように働かされ、人々の健康や福祉は無視されたのである。

産業革命後の英国は新たな工場の生産力で世界の先進国としての地位を固めたが、工場の進出や農業の商業化の中で、農本的価値観の衰退と資本主義の蔓延、労働賃金による搾取の実態が明白となり、搾取されていく貧農や労働貧民たちの不穏な動きの漂う動乱の時代を迎えていた。農村破壊と人口の都市集中で、農本的価値観は最早国民を代表せず、自由放任と私利私欲の商業主義に節度を失った大都会が形成されようとしていた。その後の食糧輸入と保護主義的な輸入阻止による物価の乱高下は、英国政府の政策の混乱を露呈して

いた。人口の都市集中と農村破壊によって、田園と都会という対立の図式や相反する価値観が生まれ、双方が互いに接点を喪失するにつれて、貧富の格差の増大や利害の衝突が顕現化するに至った。このような現状を憂い、私利私欲の物欲を追求する商業主義に対抗する均衡力の必要性をコールリッジは力説したのである。農本的価値観の破壊と産業革命後の商業主義、さらに、フランス革命後の英仏戦争が英国社会に混沌とした状況をもたらしていることを彼は誰よりも憂慮していた。過激なジャコバン主義に対する反動の気運の中で、革新的議論や労働貧民救済の提唱などは、混乱に拍車をかけるか、民衆を暴動に導く恐れがあったという不穏な社会状況であった。

コールリッジの『政治家提要』によれば、フランス革命と恐怖政治の原因は、社会の政治的不安定さやその社会の指導者の無見識に他ならず、厚顔にも官能的悦楽に放蕩し、誤った哲学を偶像として崇拜したためであった。さらに、商工業階級の台頭と共に、古い封建的特権との対立が生じ、大都市では利己主義の営利心と傲慢な無神論哲学が横暴を極めた。科学技術の発達に対する過大な評価は、機械工学に予言的能力さえ与えて、国家でさえ予め計算された機械のように構築されるべきだとする風潮を生んだ。機械主義の基本原則に基づく計画の発案者が激増し、全てを犠牲にしても新たな計画を実現する強引で無反省な態度が、フランス革命を歴史上悲しむべき大事件に至らしめ、無神経な浪費と非情の圧制を生み出したとコールリッジは非難したのである。⁽¹⁾

従来の地主と小作人の関係の崩壊は、農村の破壊を押し進め、市場原理に支配された農業の商業主義を生んだ。効率と営利追求の商業的農業の推進による新たな農業社会から排除された農民たちが、都市に集中してスラムを形成し、工場労働者となって産業大都市特有の諸問題を発生させた。ペインやゴドウィン、ベンサム、リー・ハントなどをはじめとする博愛主義、功利主義、自由放任主義などの急進的社会改革運動、そして子供は人間の鏡であり親だというブレイクやワーズワスの主張やコールリッジの想像力説のロマン主義文学思想は、変化胎動の混沌とした社会の過渡期にお

ける知識人や文化人の先進的な思索の表明であった。さらに、対仏戦争の影響が農村破壊と産業革命を加速させた結果、その政治的混乱と経済的影響をコールリッジは特に憂慮して解決策を考察し、商業主義に対抗する均衡の原理の必要性を力説するに至ったのである。

道徳、宗教そして愛国心が個人の利己心を超えて、意識の拡大を果たすためには、究極の原理の必然性を証明しなければならないとコールリッジは考えた。すなわち、人間の本性に永遠に帰属し、理性からも恒久的に離反しない精神の存在を彼は強調しなければならなかった。現象面だけに関わる悟性が、影のような想念を創りだし、理性を支配して抽象化してしまうと、人間の崇高な感情は消滅することになる。真の理性だけが理念を現実化し、生命的な生産性を有して、無限な存在に関わるのである。したがって、理念と原理から生じる知識は、理性の力に他ならないと彼は説いた。⁽²⁾

地主階級は労働貧民の苦境や社会的矛盾の上に安住し、私利私欲の安逸な生活を送っていた。社会的な諸問題は彼らの日常意識の外側にあり、指導的立場にあるものが社会を憂うこともなく裕福な生活を送っていた。このような安楽と享楽に耽って社会的使命を自覚せず、無知と無関心という貴族的の冷淡さに終始する態度を改善するため、コールリッジの後期の著書は上流階級の人々の道徳や良識に訴えかける必要性に駆られて書かれた。『政治家提要』は一般の不特定多数の読者に語りかけたのではなく、どの様な職業であれ、主に有識者と呼ぶに相応しい教養を身につけた人々に対してなされた説教集であった。人口の都市集中、教育問題、参政権、フランス革命の功罪などに対する彼の考察は、今日でも尚通用しうる優れた洞察や理念に充ちている。しかし、当初の目的は達成されず、彼の著書は一部知識人を除けば多くの上流階級を読者として歓迎されることはなかった。産業革命以降の人口の都市集中は、地方分散型の農本的英国社会を破壊し、ロンドンなどのいくつかの都市を巨大な大都市に変貌させた。19世紀中頃には人口の都市集中は英国国民の約半数にも上った。貧富の差の拡大、疫病の伝染、犯罪の増加などの大都市の社会問題は、急激な人口増加と食糧

不足から生じる社会悪であり、コールリッジは厳しく当時の政府と社会制度の矛盾を批判した。

啓蒙時代の独善的急進主義の浅薄な基盤は崩壊しつつあったが、上流階層の人々が正当な原理に基づかない自信を持つという誤謬よりも、失意と落胆によって無気力に陥り、指導者達が革命的運動を止めさせようとするのを懸念しなければならぬとコールリッジは警告した。当時、一般大衆が誤った啓蒙思想によって扇動されたため、改革的な知識や展望を国民から締め出すことで平和を回復しようとする傾向が指導者層にあった。さらに、大衆に対する教育は読み書きだけで充分とする誤った考えが広まっていたと彼は述べている。教育とは人の能力を引き出し知的習慣を形成することである。コールリッジによれば、一般大衆への効果的教育は、有識者達への厳しい知的再教育を前提とするものであり、指導者層の真の啓蒙は、地主や政治家達の性格を有徳なものに徹底的に改革することに依拠するのである。⁽³⁾

初期のコールリッジは理神論や機械的合理主義から英国国教会やローマ教会を批判した。しかし、ゴドウィンの一切平等団の計画の失敗に対する彼の反省は、純粋な理性だけでは具体的で物質的な人間社会を把握できず、危険な抽象的理性の暴走を生むというものであった。コールリッジの保守政権と急進主義の両極端への批判は、神の理性の視点から英国国教会やローマ教会への批判、さらに、無神論的啓蒙思想への批判へと展開していく。初期のコールリッジは功利主義の先駆者ブリストリなどにも惹かれたが、ロマン主義思想構築に向かってのちは功利主義を否定するに至った。合理や功利に対抗したコールリッジの理性論は、全体的把握に関する法則の普遍的科学である。理性は想像力の原動力ともなる全能の神の理性の人間への派生であり、神の似像としての人間の生成力である。理性は悟性を導き支配すべき全体者の法則としての普遍的な力である。コールリッジによれば、抽象的理性が悟性に同化してしまうと、功利主義や商業主義などの半面真理に基づくジャコバン主義急進思想を生み出す。社会を混乱させ道徳律を無視する抽象的理性から政治原理を導き出すと、半真理のみの不充分で過激な思想が生まれ

るのである。抽象的理性を否定したコールリッジは、急進的合理主義に対して詩的理念と宗教的啓示による政治思想を提唱した。専制政治、ジャコバン主義的フランス革命の失敗、ナポレオンの台頭などの社会動乱は、人間性に対する配慮を欠いた功利と合理の機械主義の結果だとコールリッジは批判した。理念哲学、すなわち、先験的観念論哲学の立場から、既得権益に固執する即物的国家を否定して、彼は国家の理念を復興させるために、人間の理性と悟性の調和的關係を有機的統合において考察して、現実政治の悟性的要素に対する理性の先導性を強調したのである。⁽⁴⁾

初期のコールリッジはユニタリアンとして偉大な人間キリストを見つめ、伝統的なカソリックの三位一体の説を認めなかった。神の子キリストの啓示という超越的な宗教認識を体得するのは後期になってからであった。コールリッジは政治と宗教の両面において急進主義と反動的保守主義とを矛盾的に合わせ持ち、彼の保守主義は既成の制度や概念に対する鋭い洞察、先駆者的な批評精神、自由な進歩主義を示している。党利党略や派閥的な因習、形骸化した教会の不毛の教義を批判し、同時に、人間の無意識や芸術的創作心理、自意識と想像力の活動などについて緻密に分析し、彼は膨大なノートブックや書簡に書き記した。病弱な彼はリュウマチの痛みの鎮痛剤として阿片を常用していたが、その副作用に気づき意識混濁の悪弊に自ら苦悩した。1816年、ハイゲイトのギルマン医師に患者として居候し、1834年まで18年間を彼はギルマン家の世話になり続けた。その間、彼後期の代表作『政治家提要』をはじめとする数多くの著書を残したのである。『政治家提要』は社会の知識人達に対して、聖書の精神に基づいて考え行動することを説いたもので、特に政治に反映されて社会が改革されることをコールリッジは願っていた。

『政治家提要』と『文学的自叙伝』は、後期のコールリッジの思想形成過程を示している点で、様々な思想的遍歴の結果としての詩と哲学と宗教の融合を理解する上で重要である。『文学的自叙伝』は、後世の文学批評理論に影響を与えたもので、創作心理や詩的想像力の原理を哲学的に説き

起こし、理論構築への基本姿勢を確立させた。ハイゲイトのコールリッジのもとには若者を中心として進歩的で自由主義的な人々が集まった。時代精神の悪弊は国家と国民の意識構造の反映であり、政治的で社会的な問題の山積は病める社会制度の矛盾の現れであるとコールリッジは考えた。『政治家提要』は当時の政治と社会の問題に対するコールリッジの考察の産物であり、問題解決に対する論理的分析の鋭さや洞察力、学際的で豊かな学識を示している。時事問題に対する現実的な解決法を具体的に示すよりは、コールリッジの関心事は人間の精神機能の諸相の有機的統合や社会の事象に対する象徴的分析より、人間と社会の原理的本質の解明であった。特定の社会や団体に対する具体的な改革案というよりは、政治と社会の批評として、洞察力に満ちた彼の考察が意図したものは、信仰的教育の重要性の確認による人間と社会の原理の把握であった。諸問題解決のための哲学的な心の育成を説くコールリッジの思想は、特に読者として想定した社会の指導者層の人間教育を意味し、社会に対する意識を高めることに他ならなかった。ルネッサンスの時代の指導者は断固たる理念を持って政治を行っていたが、当時の英国の指導者は理念に背を向け、歴史哲学の知恵を無視して、目先の利益のみに心を奪われていたのである。

ミルは「ベンサム論」において、ベンサムとコールリッジを英国思想界に今後大きな影響力を持つ偉大な独創的思想家だと述べ、この二つの潮流が双璧となって英国思想の展開の大きな動きとなると論じている。⁽⁵⁾ 宗教的形而上学者でプラトン主義的観念論者のコールリッジは、ロックやヒュームのような経験論の伝統にあるベンサムとは対照的に、相反する価値観の上に世界観や認識論を構築していた。しかし、ヒュームやロックは経験論哲学を提唱して、人間の精神世界は感覚的経験に由来すると考えた。経験論哲学は唯物論を中心として、人間の墮落とキリストの救済を否定し、人々を物質的なもののみに関心を向かわせた。聖書をご都合主義で読み替えて、宗教は聖職者に任せ、人々は実利主義に走り、その結果、営利目的の現実主義の実業家が多く生まれた。感覚的刺激の因果関係の中に拘束された人間観は、本性として快

楽を追求し苦痛を拒否する功利的原理に基づいて構築されている。したがって、人間の幸福とは快楽であり、快楽を追求する行為が善となるとするベンサムの見解が生まれた。

行為の功利的結果のみを主張したベンサムは、最大多数の最大幸福の学説を説いた。ベンサムによれば、善悪の判断は最大多数の最大幸福に基づくものであり、政治における利害の調和的統合によって、全体の総和としての快楽の有効性が主張された。その後継者であるミルは、最大幸福から質的快楽と幸福への道を説いた。このような功利主義では快楽は幸福に結びつき、快楽は善とされた。最大多数の最大幸福の学説は、経済的効率によって道徳的善の基準も決めてしまう点で、倫理観の崩壊をもたらすものであった。参政権や資本主義という政治や経済の問題を抱えた社会に於いて、功利主義理論に基づいた道徳という最大多数の最大幸福の原理は、18世紀啓蒙思想の代表的学説となった。

自由意志は最大多数の最大幸福の原理のもとで制限され、快楽に基づく幸福という功利の観点からのみ価値基準が定められた。快楽と苦痛、善と悪、欲望と分別、思考作用や人間的願望などを形成するあらゆる要素を単純化し、複雑な人間性や人格を無視した功利主義は、人間を単一の快楽による幸福という機械的理論で判断しようとした。道徳的動機を考慮せず、行為の結果のみに功利的価値観を見出す思想は、コールリッジにとって受け入れがたいものであった。彼の功利主義への批判は宗教では理神論に対して向けられ、さらに、悟性中心の当時の世相に対しても向けられた。感覚的悟性に論拠した機械論的神学に対しては、宗教の基礎は信仰にあり、キリストの教えは聖書の中に求められるべきだと彼は説いた。超越的存在や霊的精神世界は、感覚的現象にのみ関わる悟性に認識されるものでないことを力説し、彼は理性の働きの重要性を指摘し、主客合一による真の認識のあり方を宗教的に考察した。この様に、コールリッジは啓蒙思想の誤謬である功利主義全盛の時代精神を批判したのである。

量的総計によって社会的幸福を計り、功利的観点から政治や経済を捉える啓蒙思想に対して、コー

ルリッジは人間の内的精神世界が社会的事象を創り出していると考え、社会問題をもたらす諸悪の根源に作用している人間の精神機能を分析しようと努めた。『教会と国家』の中で、生命は植物から動物に至るまで、肉体組織のあらゆる部分に存在して、全体として単一であり、全体を単一にする有機的な顕現を果たすという有機的統合の思想を彼は述べている。⁽⁶⁾ コールリッジは社会全体を有機的生命の類推によって、人間の精神世界の反映として把握し、功利主義や商業主義に対抗して宗教的理性の存在を力説した。商業主義や功利主義によって、都市型価値観が農本的価値観を破壊して時代精神となるに至って、コールリッジは聖書の理念が示す理性を掲げて当時の社会秩序や道徳の崩壊を厳しく批判したのである。

コールリッジによれば、理性と宗教は同じ力の二通りの顕現に他ならず、理性は単一に統合された全体の法則を知る力である。これに対し、悟性は時空間の個別的質量にのみ関わるものである。悟性が現象の類と種の科学であるのに対して、理性は普遍的なものの科学であり、全てを一つに捉えようとする傾向として、単一性と全体性を基本要素としている。全体でない無限にも、無限でない全体にも人間は安住出来ないため、理性がなければ、無限を求めて単一を失うか、単一を求めて無限を失う結果となると彼は論じている。⁽⁷⁾

コールリッジの均衡の理論においては、宗教的理性に基づく理念が、資本主義や商業主義に対抗する社会勢力として存在すべきであった。功利主義的最大幸福という目前の経済的繁栄よりも、ヘレニズム、ヘブライニズムといった西洋思想の源流にまで遡り、人間の精神活動を歴史的眺望の中で捉えようとしたコールリッジは、聖書の精神に歴史的伝統としての豊かな理念の存在を確認し、人間の自由意志に基づいて聖書の啓示を読み解こうとしたプラトン主義者であった。自然界の事物のみならず、聖書の中に豊かな象徴的意味を解説し、彼は歴史的イベントの中に聖書の伝統を把握し独自の歴史哲学を構築しようとしたのである。

あらゆる確実な知識は神の力であり、それは人間の英知として理性を通して生じる。この事が聖書の卓越性を示し、知識と行動の原理である根拠

となると彼は力説している。⁽⁸⁾ 旧約聖書や新約聖書に示された崇高な理念は、人の魂を覚醒させ、自由意志と共に自らの崇高さや無限の能力を直観させるのである。古来からの深遠な思想家は、その学説を神から与えられたもの、すなわち、靈感を起源とした知恵であると考えた。神の摂理を実現する御言葉としてのロゴスによって常に燃え続ける炎としての力こそ、人間を真理へと導くものに他ならない。コールリッジにとって、形而上学的体系よりも、聖書こそが究極の権威であり、その教義の真実性は神の啓示に依るものでなければならない。⁽⁹⁾

フランス革命の理想に熱狂したコールリッジは、最初熱狂的なジャコバン主義者であったが、後にジャコバン主義急進思想に対する分析的批評家となった。ジャコバン主義は抽象的理性による人間観や社会観の必然的結果に他ならなかった。人間と動物との区別や道徳的要素を考慮しないホブズは、抽象的理性を独断的に適用してジャコバン主義哲学を生んだ。この様に、強権の専制政治に結びつくジャコバン主義は、感覚的な悟性の対象にのみ適用された抽象的理性によって成立するとコールリッジは考えた。ジャコバン主義は一般大衆を改革するのではなく、過激な暴力革命の手段として利用された扇動行為であった。ジャコバン主義は抽象的理性の独善的暴走によって、フランス革命の理想を専制主義や恐怖政治の支配へ陥れたのである。ルソーの社会契約説に示された抽象的理性は、現実無視の純粹理論として高尚であることによって、一般大衆を容易に扇動したのである。動乱と革命の時代では、理想が抽象的であれば、より一層容易に大衆の感情をかき立て直接的行動への衝動を与えるとコールリッジは警告を発した。⁽¹⁰⁾ ジャコバン主義は現実社会無視の抽象的理性と人間の動物的本能との結合によって生じたとコールリッジは非難した。ルソーの社会契約説は国家を理想的体制に変革しようとして実現せず、フランス革命はナポレオンの台頭によるヨーロッパの動乱を発生させただけであった。

抽象的理性の不十分な人間観が専制的になった結果、ルソーの社会契約説は人間社会に独善的に適用され、さらに、抽象的理性と社会全体が結び

ついた絶対主義政治と同時に、人間の絶対的自由の神聖な権利を独断的に認めるに至った。ジャコバン主義的啓蒙思想は、抽象的理性を普遍的で生得的なものとして政治思想に適用し、抽象的理性で道徳を支配しようとした。しかし、理性が抽象的理性として個人や国家を支配し導くことは不可能である。この様に、ホッブズの反道徳的哲学、ベンサムの功利主義、ルソーの社会契約説などにおける抽象的理性の独善的適用による過激なジャコバン主義に対する分析的批判を深めながら、コールリッジはロマン主義思想の基盤となるべき理念哲学の構築に努めたのである。コールリッジにとって、理性は人間の魂の自由な活動のために神より与えられ、悟性が適用すべき原理としての理念を示すものである。ロマン主義と啓蒙思想との関係は、徐々に類似点よりは相違点のほうが目立つたために、対立と批判の意識が彼に生じるに至った。理性が悟性から切り離されて適用され主観的なものとなると、一般大衆の無軌道な権利という抽象的理性の産物を生じさせることになる。したがって、悟性の支配による機械的合理や感覚的功利の世俗的客観性も、思想上の誤謬であり混迷の時代精神の原因であり退廃的世相の悪弊だとコールリッジは考えた。

(2)

デカルトの理性への無条件の信頼は、ルネサンスの伝統を示して、科学における理性の万能を主張したが、政治・宗教・道徳では保守的であり、急進的改革を認めようとはしなかった。したがって、絶対主義の矛盾は1680年代に表面化した。デカルトの理性万能の勝利は18世紀に至って実現したと言える。しかし、18世紀啓蒙思想の抽象的理性は広大無限の宇宙を小部分の集合体へ卑小化し、人間の精神機能を感じ覚的知覚の連想作用に分類し、詩を記憶による既成の心象の機械的配列に貶めてしまった。抽象的理性による哲学の機械主義は、人間の知性を死の影で満ちし、至高の理念を既成概念で処理する思想的誤謬を生みだし、真理への直観力を概念で説明することに終始するものである。この様な機械主義哲学を排斥して人間

に生命的知識を与え、精神を発達させるための抜本的社会変革の必要性をコールリッジは主張した。彼は生命的全体としての有機的統合と事物の機械的結合の対立的矛盾を常に意識していた。コールリッジは機械的世界観と有機的世界観の違いを死と生の用語によって示し、彼の哲学的思索や思想体系の構築にこの相違が重大であることを強く意識し、有機的統合の生命的原理を提唱するに至ったのである。

コールリッジの会話体詩には汎神論的な立場で、万物の有機的統合としての生命的思想を歌ったものが多い。有機的統合の思想とユニテリアニズムが、彼の中で呼応して、彼は伝統的キリスト教の教義や聖書の中のイエスの問題にも眼を向けていくことになる。さらに、彼はユニテリアンから伝統的カソリックの三位一体説へと転向し、創造主たる神と被造物である人間との関係についての考察を深める必要に迫られていた。デカルトやロックへの哲学批判やユニテリアンへの宗教批判は思想的遍歴をするコールリッジの自己批判の結果でもあった。

コールリッジの初期の傑作「エオリアの堅琴」や「宗教的瞑想」においても、彼は自然の生命を歌い、有機的統合としての万物の生命という思想を表明している。その後、この有機的生命的思想を形而上的に考察し、生命哲学構築への原点としたのである。形而上的に聖書を愛読し、プラトンやプロティノスの著作に親しみながら、自然界に不可視の神の創造力が働いていることをコールリッジは詩と哲学と宗教から学際的に考察していた。神の創造力は能産的で形成的な力であり、生命力に他ならないと確信するに至り、彼は終生パウロとヨハネを愛読して、あらゆる存在に神の生命力を読みとっていた。プロティノスの影響を深く受けていたコールリッジの思想の基盤は、単一と多様の有機的統合の原理であり、⁽¹¹⁾この事は「エオリアの堅琴」の中に如実に表れている。生氣漲る森羅万象の躍動が人間の魂のリズムに呼応して思想を生み、あらゆる生命的振動が一つの塊となって、万物の有機的堅琴の上に吹き渡り、一つの知的な微風の如く広がっていくと表現されている。⁽¹²⁾「エオリアの堅琴」では、汎神論的に万物の生命

は神から派生する英知の風によって生かされ、神の知識の風は神の力であり、人の理解の及ばないところで作用していると彼は表現している。不可視の神の創造力が自然界の有機的統合の力として、人間の精神にも機能していることを彼は想像力説によって明確に定義している。

この様な彼独自の汎神論的観点から、デカルトやロックの機械主義哲学は批判されるべきものとされた。カントの『純粹理性批判』に出会い、彼は人間の精神機能の分析の必要性を確信して、合理主義的啓蒙思想家達はキリスト教の根拠や神の存在証明を現象面にのみ関わる感覚的悟性で論じていると断じた。この様な超越的問題の考察は、人間の精神機能を分析してはじめて可能になると考え、コールリッジは理性と悟性の区分を社会に対する批評原理として啓蒙思想を批判したのである。したがって、独自の理性論を確立するまでは、彼は理性と悟性の整合性に苦悶の思索を続けざるを得なかった。彼の神学に理性と悟性の哲学的考察が融合して、詩と哲学と宗教の融和としての有機的統合が生み出され、空想力と想像力の思想の心理学的で形而上学的な中核的部分が形成された。この様な形而上学原理が文学のみならず、社会全体に対する恒久的批評基準とならねばならないと彼は考えた。宗教においては理性、哲学では理念、文学では想像力がコールリッジの思想の中核であった。さらに、理性を中心とした神学と想像力を中心とした文学が融合して、聖書を想像力で読み解き、文学の創作に理性の力を意識して、歴史哲学の理念構築に向けて分析的考察を続け体系化することが彼後年の最大の課題となった。

コールリッジにとって、死の哲学である感覚的悟性中心の機械主義哲学が、物理的現象の質量的把握に終始するのに対して、彼の生命哲学は神の似像としての人間に神が宿り、神の最高理性を通して神を知る理性の理念哲学である。この宗教性がコールリッジの理性論の大きな特色であり、カントの論理学の理性と非常に異なる点であった。コールリッジの理性は真理の総体の精神的土台としての現実化の原理である。信仰を支持する理性は、先験的であり、経験の基盤となって、事物の混沌を経験へと形成するものである。神の啓示と

しての聖書は、理性そのものの形として厳粛で威厳に満ちていると彼は説いている。⁽¹³⁾ 悟性から抽象された概念は想念であり、想念が具体化すると知識となる。これに対して、悟性の知覚的形式から抽象されずに、理性の働きを受けた想像力が産出するもので、感覚的存在とはならないものが理念に他ならない。⁽¹⁴⁾ 理念がアリストテレスやカントにおける様に統制的であるか、プラトンやプロティノスにおける様に形成的で自然の生命力と融合するものであるかは、コールリッジにとって哲学上最も重大な問題であった。

コールリッジが政権を批判し改革論者としての立場を堅持したのは、理念と現実との矛盾を常に意識していたからである。コールリッジの理念形成の道は、ドイツ観念論哲学の研究によって、カントからフィヒテ、シェリング、ヘーゲルという思想的展開を辿ることになる。カント研究によって、理念は夢想や願望ではなく規範的原理であることを確信して、極端な唯物的機械論を打破すべく、コールリッジは超感覚的世界の論証に努めた。シェリングの自然哲学はコールリッジの思想構築の刺激となり、審美的要素の論証を文学に求めていた彼に思想的充足を与えた。カントやシェリングを始め、当時の自然科学の有機説によってもコールリッジは示唆をうけたが、その思想の多くは基本的に彼にとっては既に自明のことであった。

コールリッジの思想的遍歴には、感覚的悟性の機械主義哲学に対する批判、理性と悟性の峻別による精神機能の論証、想像力説のためのドイツ観念論哲学の探究、能産的自然を説く有機的統合の原理や汎神論的自然観のためのシェリングの研究、そして、神の理性や超越的理念を志向するプラトンの宗教観などの特徴が見られる。さらに、カントは機械主義哲学の不毛の思索から脱出する重要な手がかりを彼に与えたが、超越的実在に関する考察では、論理学者であっても決して期待するような形而上学者ではなく、コールリッジはカントの限界を乗り越えねばならなかった。

カントによれば、道徳的認識は他によって影響を受けない人間の精神機能であり、道徳律は人間を支配し、人間の自由な理性的本性を保証するものである。カントはコールリッジの思索に自信と

体系を与えたが、感情を排除した冷徹な道德の形式的論理にコールリッジは反発した。しかし、カントの自由の観念は彼の思索に深く浸透し、さらに、真の理性の姿への暗示は彼に強い印象を与えた。頭脳と感情の相克の中で真の理性を解明しようとしたコールリッジは、理性が偉大にして崇高なるものに帰属する精神機能に他ならないと確信し、無見識な抽象的理性こそ悟性に他ならず、生命的な理念と対立するものだと悟ったのである。

カントは知識の限界を説き、人間が時間と空間の事物認識に宿命づけられている以上、物自体の客観的把握のための絶対認識は本来不可能であるとした。カントによれば、あらゆるものが時空間の限られた認識による錯覚とも言える。しかし、コールリッジはカント以上に統一的理念の世界の必然性を主張し、人間に絶対世界を認識する先験的な内的器官があると考えた。彼はカントにしたがって人間の精神機能を悟性と理性に区別したが、独自の理性論を構築するに至った。感覚的現象や概念に基づく経験世界を把握する能力を悟性と定義し、機械主義的原理や非生命的事象を悟性の世界と彼は断じた。これに対して、絶対的事物自体に対する認識における超感覚的な能力が理性であり、理念形成に携わる理性が認識作用に機能することによって、時空間を超越した絶対世界や永遠の真理としての神の存在に迫り、先験的認知を可能にするとコールリッジは主張したのである。

この様に、人間の精神機能は理性と悟性で成立する。悟性は動物と同じ受動的な認識能力であって、物理的で生理的な法則によって即物的に判断して、感覚的現象の概念の分類や整理をする推論的能力である。さらに、コールリッジによれば、悟性は記憶による一般化の能力として現象を認識する機能であり、経験によって構成される絵画的図式にすぎず、人間は悟性によって理念を把握することはできない。これに対して、理性は感覚を超越した理念を把握するのであり、無限に対する内的感覚の器官である。コールリッジにとって、神や永遠の真理といった超感覚的理念は理性の対象であると同時に理性と一体でもある。神の似像としての人間が神からの派生として有する理性は、人間に対する神の啓示であり、宗教的啓示は理性

の顕現であるとされた。感覚的悟性は各個人によって質量で異なる能力であるが、理性は人間に平等に与えられた能力であり、唯一絶対の全体者に関する人間の普遍的認識科学である。

理性と悟性の関係を峻別しても、理性は純粋に理性のみではその存在を顕現し得ず、本来の相互機能において明確な区分を不可能にするほど人間精神の中で有機的に統合されている。理性は全体者としての神から人間に派生する能力であるが、感覚的悟性を欠いた理性は抽象的理性となって現実感を喪失するのである。理性は無限の知的進歩の可能性を人間に与え、本来、一切平等団やクレラーシーを構成すべき人間は、理性による知的進歩を果たすべき少数のインテリ階級に限定されていた。物理的で生理的な感覚的世界は悟性によるもので、神や永遠のような純粋に理性の世界ではないが、悟性から切り離して理性は存在を顕現できず、コールリッジの理性は生得的存在として悟性に生命を与えるものである。人間の感情や宗教を無視した独断的な抽象的理性は、妄想にすぎず、冷酷な不道德を生み出し社会に悪弊を及ぼすとコールリッジは難じた。純粋な理性は人間に平等に与えられているが、悟性と切り離せば人間世界に関する思想としては存在し得ない。政治や社会の思想は実利的な現実主義でも純粋な理想主義の理論でもなく、人間の認識に関する理性と悟性の原理に基づくべきだとコールリッジは考えた。

悟性による理性の支配、私利私欲の物欲を生む功利主義や商業主義の中で欠落した道德的感情や衰退した想像力などの病める社会現象を、コールリッジは時代精神の悪弊として厳しく認識していた。ナポレオン戦争後の経済恐慌は、失業者と労働貧民の発生を招いた。理性によって調和されるべき悟性は、理性を略奪して商業精神や功利主義の急進的發展を促し、無神論的啓蒙思想や冷徹な機械的合理主義の死の哲学を生んだ。コールリッジによれば、機械主義哲学は可視的可能性を要求するため、生成能力を持たない部分と部分の関係である構成と分解に終始する。それは構成要素の正確な総和を扱い、生命のないものにのみ適応される死の哲学である。⁽¹⁵⁾ 生命哲学においては、構成要素となる相対的な力が相互に浸透すること

によって、より高度な次元で第三のものを産出するのである。

この様な現実社会の政治経済の矛盾と混乱に対する批判として、コールリッジの思想は理性と悟性の相互関係の考察を中心として展開された。コールリッジは悟性への過信と専横に対して警鐘を鳴らし続けた。悟性は時空間における質量に関する現象の認識作用として、物理的法則や感覚的経験を構成し、さらに感覚的素材に基づく記憶や経験の判断能力として、物理的で生理的な現象の概念を分類し、感覚的現象を機械的に抽象化して推論する機能に他ならない。ロック以降、経験論哲学は悟性を至上として理性を無視したが、超越的実体の把握には不適格な悟性は、感覚的経験や物理的法則以外のすべてを否定し、感覚的素材の質量的認識のみを問題にしたのである。

理性顕現の手段としての悟性は存在し得るが、理性から離脱した悟性を疎外された悟性の横暴とコールリッジは批判した。理性は有機的統合の理念を示すという究極的目的を持っているのに対して、悟性は理念提示のための中間的な手段にすぎない。悟性は理性を凌駕するものでなく、悟性そのものの実体は空虚であり、生命的理念や超越的実体に直接適用され得ず、功利的で感覚的な物質世界に対象を限定するものである。悟性が真理を捉えようとしても不確実であり、事物に恒久的な普遍性を与えるには抽象化するだけであり、抽象的理性を生み出すのみである。⁽¹⁶⁾ したがって、悟性が物質世界を逸脱して理性を支配することは悟性の横暴に他ならないのである。悟性に支配された哲学は感覚と功利にもとづいた無神論的機械主義哲学、すなわち死の哲学に他ならないと彼は批判した。革命を扇動したフランスの啓蒙思想家の無神論的機械主義哲学やベンサム功利主義哲学には、この忌むべき誤謬が如実に表れていると彼は訴えた。

コールリッジによれば、人間が宗教性を失うと抽象化された理性が妄想となって急進的思想を生み、知的意志は冷酷で不道德なものになってしまう。国家構造も理性と宗教と意志を構成要素としているために、宗教が欠落してしまうと、抽象的理性が猛威を振う。包括的把握力や先見性を持つ

理性が孤立すると、非現実的思想を生み、不道德な思索へと導くのである。それは無政府主義や利己主義に帰着するもので、全体としての幻影のために個を犠牲にしたフランス革命の虚偽の哲学をもたらしたとコールリッジは批判した。ジャコバン主義は異種混合の怪物であり、独裁政治を成立させたものであり、経験と悟性に属するものに対して理性を独断的に適用した抽象的理性で成り立っている。ジャコバン主義は既存の制度や現状の修正に配慮せず、抽象的理性による概念で政治や社会を変革しようとして、単なる動物としての人間に訴えかけ、大衆を暴動へと扇動するものだとは彼は糾弾した。⁽¹⁷⁾

悟性は霊的存在や法則を捉えることが出来ず、経験に関わる能力であり、理性の光を得ることがなければ、世俗的な物質世界以外に認識の対象を持たない。現象を分類するための用語や一般概念を創り出すのが論証的悟性であり、深みのない明瞭さで限界の中で統一性を考察するもので、実体のない表面的知識に終始するものである。悟性の明瞭さと感性の豊かさを統合して完全なものにするのが想像力であり、想像力によって悟性は直観的な生命力を与えられるのである。実体を持った生命的な理性は、人の完全な精神であり、単一でありながら多様でもあり、悟性に浸透する神の力として、感覚も悟性も想像力も全てを含有するものである。理性は人間の個人的な所有物ではなく、光のように自らを顕現し、人間の中に存在するものである。

要するに、社会状況や人間性を無視する悟性的な政治理論が独断的に適用されると、ジャコバンの急進主義思想になった。コールリッジは抽象的理性によるジャコバンの急進主義の啓蒙思想を死の哲学と批判した。悟性が社会を支配すると功利主義の過剰な商業精神を生み、理性が抽象化されるとジャコバン主義の母体となる抽象的理性になり、フランス革命を幻滅的結末へと導き、さらに、意志が抽象化されるとナポレオンの自己崇拜や冷酷な専制主義に発展すると彼は糾弾した。この様に、コールリッジは哲学的な批判精神をもって当時の政治や世相を眺めた。彼はフランス革命の幻滅的進行によって現実を思い知らされ、夢をさま

されたロマンチストであり、悲観的な現実認識を持つに至った。現実世界の中ではストイックなコールリッジは夢から覚めても、夢への激しい情念を失わなかった。彼の飽くなき情熱と夢が当時の色あせた時代精神から彼を際立たせ、彼の文学と思想を偉大なものにしたのである。

(3)

コールリッジは自然界に神を把握する手段を理性と宗教的啓示に求め、さらに、本来相反する理性と宗教的啓示の調和を有機的統合としての国家構成の重要な要素と考えた。コールリッジにとって、理性は神の似像としての人間に与えられた心眼に他ならず、宗教的啓示は神から与えられた霊的視力であった。コールリッジの思想を構成する両者は、相反するものではなく有機的に補完するものである。理性と宗教的啓示の調和的融合は、コールリッジに一貫した有機的統合を与え、それは感情と頭脳の相克の解決に他ならなかった。

コールリッジにとって、真の哲学的考察は、森羅万象の観照によって人間と自然の融合に対する理性の直観的把握を含むものである。誤謬の哲学的考察は、人間の主体的精神と客体的自然の相違に対する抽象的理解であり、死滅的事物と生命的思考の対立関係の抽象的知識に他ならない。それは対立と相違に関する単なる反省の哲学的考察であり、日常的現実には有益であっても哲学としては生命的言語を死滅的言語に下落させるものだとしてコールリッジは考えた。繊細な感性が冷徹な論理によって萎縮し、多くの生硬な思考が意識の限界を作りだして、自発的想念を抹殺し、頭脳と感情の相克が未知の精神領域を死滅させることに彼は苦悩した。自己省察の中で彼は感情と頭脳の相互関係に大きな関心を抱き、肉体的感性と精神的飛翔は人間精神の根本的要素としての理性と悟性の相互作用を促すと説いた。

コールリッジの理性は多様の全体を一者として把握する有機的統合の力であり、この一者こそあらゆるものの認識に必要な根本的理念である。悟性は分類と記憶の機械的能力であるが、理性は直観的に全体を理念とする統一的な力である。思弁

的であると同時に実践的でもある完全な理性は、自然を単なる直喩以上のものとして捉え、自然界における象徴を畏怖の念と共に捉える。理性の生命力は全てを統一体として認識する。この至高の統一体は地上の存在の極致的完成として、新たな連続体へと繋がるものである。植物の有機的生命は自然界の統合性を象徴し、多種多様の形態は自然界に託された多様性を示している。⁽¹⁸⁾ 理性は生命力として感覚的悟性や想像力に生命を与えて顕現する普遍的な力であり、一者たる全能の神の力の人間への派生に他ならず、コールリッジは悟性による死の哲学に対して、自らの理性論を生命哲学と呼んだ。意志力によって理性と悟性が調和的關係で結びつき、悟性に生命が与えられて理性は実践的存在として具現する。理性が理念を統一的に把握し理念を産出するのは、元来理性が理念の一部だからである。なぜなら、理性は超越的存在を認識する器官であり、また、その認識対象と同一の器官でもある。理性は自らの存在の具現によって一者としての全能の絶対者の存在を証明している。コールリッジの理性は、一者なる全能の絶対者の理念を認識すると同時に、先験的にその理念の一部でもある。したがって、理念は有機的な生命であり、無限の生産性をもつ一者なる全能の絶対者の力に他ならない。有機的統一体としての全体者の理念は、無限で広大なものへの畏怖の念に対するコールリッジ的な表現であった。

自我への哲学的考察の中で導き出される先験的観念論や審美主義的唯心論においては、自然は自我の産物であり、理性の一大体系であるという自然哲学を生む。したがって、神から派生した人間の理性は、自然の中にも神の理性として生きている。聖書と同様に、自然界を神の偉大な書物として把握することをコールリッジは説くのである。⁽¹⁹⁾ 自然は全能なる神の属性を明示しているので、自然の中に精神世界の象徴として照応するものを見出すとき、自然は絶えず人間に語りかけてくる詩に他ならないと彼は解説している。コールリッジにとって、真の自然哲学とは象徴の科学である。象徴は隠喩や寓喩、比喩や空想ではなく、それが表す全体に本質的部分として存在している。この意味において、神は自然界における象徴によって

人間に語りかけてくるのである。⁽²⁰⁾ 自然は神の理性の無意識的な形式であり、意識的存在としての人間は、自然を意識的形式に把握する傾向を持つ。人間にとって、自然宇宙はあらゆる力の融合の有機的統合体として、生命と意識を産出し続ける。自然は生成する精神として意識的自我と同化され、その生成過程は神の理性から人間の理性へ移行する中間的形式である。自然は自己目的でなく、全体の相の目的で意義を発揮する。過渡的瞬间としての現象は、様々な力の相互作用で新たに繰り返される。自然には相反する諸勢力があり、あらゆる自然現象は二元論と両極性を根本原理とし、対立勢力の融合が分裂的相反を産み、相反が有機的統合を生んで、自然界で神の理性は無限的生成過程を繰り返し展開し続けるのである。

コールリッジは理性と悟性の峻別をカント哲学から導入したが、独自の理性論の構築への必然的な道を生来プラトン哲学から伝授されていた。感覚的物質世界を凌駕する超越的實在へのプラトン主義的確信は、彼が感覚的知覚を信念や信仰の基準と決してしなかったことに示されている。プラトン主義者であるコールリッジにとって、超越的實在とは全能者として絶対的存在である神であり、神の理性から与えられる人間の理性の理念こそ重要な位置を占めていた。コールリッジの理念は能産的自然としてプラトン主義的な生命力や構成力を持ち、さらにプロティノスから大きな影響を受けるに至った。理性を神の似像としての人間への神の理性の派生と捉え、プロティノスに倣って人間は神から先験的に与えられた理性によって、理念を把握しようと彼は考えた。理性は創造的であらゆる認識に先行し、悟性は事物に後続するもので、記録や分類をする動物的な精神機能である。神の似像として創造された人間の姿は、理性の先験的優位性を根拠として説明しうるのであるとコールリッジは論じている。⁽²¹⁾ 理念の作用において存在する先験的知識が、感覚的世界における完全な有機的統合を体現する唯一の資格であり、先行する知識がなければ、経験そのものは過去へと後ずさりしていくと彼は主張した。認識の対象でなく、必然的仮説でしかなかったカント哲学における物自体は、コールリッジの思想では理念的認識

の先験的實在となるに至ったのである。

18世紀の理性は感覚的経験の世界に属していたが、コールリッジの理性論は17世紀的な宗教的理性である。宗教は普遍の中から個の存在の根拠を得ているものとして個を扱う点で、理性と同一である。したがって、理性と宗教と意志が三位一体の有機的統合となって象徴を生む時、人間は人格的に成熟を果たすのである。⁽²²⁾ この様に、一者なる全能の絶対者や超越的存在としての理念を認めない功利主義や悟性偏重の経験論哲学を批判し、ジャコバン主義の抽象的理性を否定して、感覚的悟性を先導する理性の優位性をコールリッジは主張した。コールリッジは生来のプラトン主義者であったので、カントのドイツ観念論哲学に出会った後も、超越的理念探究への情熱を失わなかった。17世紀英国思想や聖書を中心とした宗教的考察の中で、彼独自の思索はカントを独自の解釈で受け止め、人間の精神機能の分析的探究による歴史的で生命的な独自の理念哲学として定着するに至った。コールリッジは思想の体系的枠組みを模索し続けたが、あまりに壮大な理念の広がりを見せたので、最後まで体系化を完成するには至らなかった。しかし、ノートブックや書簡に示されているように、彼は自己の経験から意識の深層に対して心理学的に実に綿密な精神分析を行っている。一つの事象を様々な諸学問分野から論究し、あらゆる問題を一つに融合し有機的統合において眺めようと彼は努力していた。

宗教的立場は初期のユニテリアニズムから詩的汎神論を経て、伝統的カソリズムに回帰するという彼独自の精神的遍歴を見せている。17世紀の英国思想の伝統にコールリッジは親しみ、その宗教的形而上学を研究し、17世紀の思想の本質に有機的統合の存在を認識していた。17世紀の英国では、ジョン・ダンやジェレミー・テイラーなどの思想家達が、知識人のみならず一般大衆にも受け入れられ、人々の思索を促し、特に宗教が真剣に論議され深い思考を生みだしていた。コールリッジの有機的統合の学説は、神の啓示と信仰の神秘によって、人々の悟性の目を啓発することを目的としていた。動物も人間も必然的法則に支配された機械と見る哲学は、唯物的哲学であり死の哲学

に他ならないとコールリッジは非難した。彼は17世紀以前の思想の伝統を研究し、生命哲学の構築によって死の哲学に対抗し、人間を機械として捉え非生命的で無神論的自然を生み出した思想家としてデカルトを批判した。18世紀啓蒙思想の機械論や急進主義を批判する対抗的均衡の勢力として、彼は17世紀英国の思想の伝統の重要性に注目したのである。デカルトやロックやベンサム思想の中に、彼は誤謬を見出し、17世紀思想の伝統の視点から問題点を論じた。17世紀思想は彼の精神的基盤となり、英国思想の伝統として把握されて、ドイツ・ロマン主義に劣らず、彼の知的特性に深く関わっていた。フランス革命をもたらしたのはフランスの啓蒙思想であり、その思想の誤謬を歴史的視野の中で伝統的原理の研究によって分析しなければ、現象面での批判に終始し、抜本的改革への具体的提示とはならないと彼は考えた。伝統的原理の思想はコールリッジの思索の中で、独自のコンテクストで練り直され、新たな意味を与えられた。彼の造語好きもこの様な新たな言葉の可能性や新たな意味の空間への模索を示すものであった。ノートブックや書簡には、微細に至る心理学的洞察や先覚者的な思索の断片が書き残されている。伝統的価値観が彼の思索の中で、独自の歴史哲学として蘇り、新たな活力と意義を与えられたのである。

コールリッジによれば、アリストテレスは史上最大の悟性的概念論者であるのに対し、プラトンは理性の生命力を生得的な理念の中に認めていた。感覚的な経験でしかない悟性や、人間性から遊離した抽象的理性を批判して、理性による理念のみが唯一絶対の真理の具現であるとコールリッジは考えた。コールリッジの理念は究極的目的に関する知識であり、国家は国民の安全な生活という物質的目的の他にも、精神的目的を果たさねばならず、国民の人間性に対して理性や道徳を育成しなければならないのである。コールリッジにとって、深遠な思想は豊かな感情を伴って成立するものであり、あらゆる真理は宗教的啓示として人間に訪れるものであった。宗教を理知的論考で証明も反証もできるとした合理主義全盛の啓蒙思想は、社会権力と癒着した聖職者や腐敗した宗教組織、熱

狂的聖書崇拝者などの無秩序な言動を助長し、真の宗教不在の時代を招来した。聖書の中の重要な教義の語句を字句どうりに逐語的に解説しようとする態度が、不信心を増殖させるとコールリッジは非難した。⁽²³⁾ 頭脳と心情の融合、すなわち、哲学的真理と人間の内的事実との調和的融合としての有機的統合を模索することによって、宗教が高度に哲学的に存在理由を持ちうることを彼は力説した。

聖パウロの言葉の真実を信じ、聖書を熟読し、思慮深く謙虚に事物の意味を根本的に問い直し続けることをコールリッジは説いた。この習慣を身につけることによって、神の神秘に対する完全な認識を身につけ、霊的直観に至ることが可能になると彼は述べている。神を知る英知と啓示の霊としての信仰の神秘によって、悟性の眼が覚醒されることの必要性を人々に説くことがコールリッジの思想の大きな目的となった。⁽²⁴⁾ 生命的信仰は神を知ることに対する人間の確信を前提とするものであり、無知な者に信仰心を育むという知識の伝達は、聖書を通して示された宗教そのものの使命である。コールリッジによれば、聖パウロは魂の完成を直観的に観照することを説いているのであり、究極の至福とは永遠の相において真理を明確に観ることである。宗教は熱を持たない光でもなければ、光を持たない熱でもなく、自然の生命をかき立てる太陽に他ならないとコールリッジは力説している。神を知することは生命的で霊的な行為であるので、それは人間には計り知れない無限の充溢性を伴った認識である。

宗教の要素は人間の精神機能の理性と悟性に他ならず、この二つの力の生命的相互作用が、有機的統合となって真の宗教を生み出す。⁽²⁵⁾ 真の宗教には抽象は存在せず、唯一で無限の神性に与るものである。宗教は作られるものではなく、自ずと生まれるものであり、必然的に生成展開するものである。コールリッジによれば、宗教は偉大なるものの象徴であり、あらゆる被造物を通して同じ似像を人間は観るのである。宗教は魂の行為であり、無限の霊の統合性を有限の世界で明示するのであり、霊の豊かさをあらゆるものに浸透する生命力で表すものである。宗教は神の霊の豊かさ

を示すだけでなく、人に伝達するために、人に説く教義の言葉の中に霊の溢れる性質を有するものである。宗教は神の愛を表し、神の愛は知的で道徳的で霊的な力の調和的な有機的統合である。⁽²⁶⁾

経験論哲学を主流とする18世紀の啓蒙思想は、直観や靈感を否定し、理性を無視して悟性の独断を許した。これに対して、コールリッジのロマン主義思想においては、直観や靈感、すなわち理性の優位性が主張され、感覚的悟性でなく理性によって直接的に超越的存在は捉えられるとされた。先験的存在として神の力を直観や靈感によって把握して、神の理性と人間の理性との間の主客合一を果たし、さらに理性が悟性を先導することによって、有機的統合の認識を人間は得ると彼は考えた。人間の精神機能と経験内容の分析は、コールリッジのノートブックや書簡に多くの記述となって残されており、彼の思索の中心的課題であったことを示している。要するに、精神と経験の分析は、理性と悟性の機能の分析となり、彼独自の有機的統合の認識論を生んだ。理性と想像力、悟性と空想力、理念と概念などの相反と融合の関係の理論は、人間の精神機能に対するコールリッジの分析的考察の結実であった。

この様に、コールリッジの理性は神の啓示を受け、象徴を読み取る人間への神の力の派生である。理性は普遍的真理を直接認識する直観や靈感であり、人間に与えられた神の力の他ならない。理性は個人的能力ではなく、神から派生する生命的根源であり、神の力を受けて人間に直観や靈感が与えられるのである。神の最高理性は人間の理性に派生するもので、コールリッジにおいては、理性は人間を超越的存在に接することを可能にする宗教的な力とされた。人間が有限的存在を越えて、超越的存在としての神と接することが理性によって可能となる。この理性によって人間は超越的次元に関わることができるのに対して、空想力と密接に関係する悟性は、感覚や知覚によって集約された素材を基盤として機能する物質世界の具象にのみ関わり、意識する主体そのものの存在を限定させるものである。悟性の横暴を許して、聖書の啓示を否定すれば、人間は単に感覚と空想の奴隷に墮落すると彼は警告した。したがって、感覚も

空想も悟性本来の受動的媒体として理性の通路となれば、真理との正しい関係を人間は維持することができる

とコールリッジは強調したのである。⁽²⁷⁾ 本質的には動物にも本能的に存在している悟性は、因果律や分類を中心とした論証の機能であり、感覚や知覚に支持されて、受動的な機能として空想力を働かす。しかし、人間の複雑な精神機能においては、理性が中心となって自由意志によって、悟性と有機的に関連しながら機能する。理性の影響を受けた悟性は高次の精神機能に関わる。高次の悟性はさまざまな現象を分類するのに必要な概念や用語を作り出すのである。しかし、全体の相において物を眺め、有機的統合としての生命的な理念を把握する理性とは違って、悟性は時空間に限定され、些末な事物の物質的質量に関わり、現象を分類し事象の因果関係についての学識を構成するのである。コールリッジの有機的統合の思想はドイツ観念論と英国の経験論の融合であり、西洋思想の伝統的源流としてのヘブライニズムとヘレニズムの壮大な結合への試みでもあった。普遍的な理性とは神であり、神の理性の派生としての人間の理性は、常に神と対峙しながら、両極の均衡へと志向する。神の理性の下では、存在すべてが神の生命を与えられて生きているのである。

全体を把握する理性は、全体を個に集約する力、すなわち、普遍的真理を個に収束する力を持たねばならない。その時はじめて、真理は生命的実在を得るのである。コールリッジにとって、この力とは宗教に他ならず、理性と宗教は同じ力の二つの表出であり、人間本性の至高の称号であり、象徴である。理性も宗教も自由意志が伴わなければ存在し得ず、意志は駆り立て動かす力である。理性と宗教に意志が内在すれば、英知と愛となって顕現することになる。コールリッジによれば、英知は旧約聖書に、愛は新約聖書に多く見られるものである。⁽²⁸⁾ さらに、良心とは理性でも宗教でも意志でもなく、霊的感觉として、意志が宗教と理性に統合した時の経験に他ならないのである。

政治学の基本原理としての英知を説いている旧約聖書の研究を指導者層や有識者に対して彼は奨励し、神の愛の摂理を説く新約聖書の研究を大衆教育の基本原理解構にすることを提唱した。コー

ルリッジによれば、聖書は実在に関わる生命哲学であり、聖書の歴史的原理は生命的胚種として、現在に未来を包含し、有限の中に無限が潜在することを示すものである。あらゆる存在が過去に対して原因の無限的遡及となり、未来に対しては結果を無限に生み出す過程として悟性に示される。そして、あらゆる境界を越えて作用と反作用の無限的連続として悟性的認識がなされる。しかし、現象の時空間を超越して真理の内奥に至るとき、個における全体の内在の神秘が、真の理性に明示されるのである。コールリッジにとって、聖書は未発見の無限の宝庫であり、未知の真理の力を示すものであり、神秘の根源に与る深遠な問題に対する哲学的考察を促すものに他ならないのである。

注

- (1) R.J.White (ed.) *Lay Sermons* (Princeton, 1972) pp.33-4. 以下 L.S. と略記する。
- (2) L.S., p.23. 『俗人説教』と英仏戦争当時の政治経済の社会問題については、John Colmer, *Coleridge* (Oxford, 1959) pp.131-53を参照。
- (3) L.S., p.39.
- (4) L.S., p.69. また、相反物の有機的統合や両極性の理論については、R.H.Fogle, *The Idea of Coleridge's Criticism* (University of California Press, 1962) p.4 を参照。究極的調和としての真理と想像力については、W.B.Crawford (ed.) *Reading Coleridge* (Cornell University Press, 1979) pp.57-62を参照。理性と悟性における有機的統合に関する古典的研究として、G.Mckenzie, *Organic Unity in Coleridge* (University of California Press, 1939) pp.6-13がある。理性論については、拙著『コールリッジの文字と思想』(千城, 1989) 第6章で詳しく説明している。フランス革命とイギリス・ロマン主義の関係については、同書第10章で考察しているので参照のこと。
- (5) F.R.Leavis (ed.) *Mill on Bentham and Coleridge* (Cambridge University Press, 1980) p.99.
- (6) J.Colmer (ed.) *On the Constitution of the Church and State* (Princeton, 1976) p.179.
- (7) L.S., pp.59-60.
- (8) L.S., pp.20-1.
- (9) L.S., p.106.
- (10) L.S., p.15.
- (11) J.Shawcross (ed.) *Biographia Literaria* (Oxford, 1939) vol.II, p.230.
- (12) Hartley Coleridge (ed.) *Coleridge Poetical Works* (Oxford, 1974) p.101.
- (13) L.S., pp.18-9.
- (14) L.S., pp.113-4.
- (15) L.S., p.89.
- (16) L.S., p.20.
- (17) L.S., p.63.
- (18) L.S., pp.72-3.
- (19) L.S., p.70.
- (20) L.S., p.79.
- (21) L.S., p.18. コールリッジの思想の理論形成過程については、William Walsh, *Coleridge* (Chatto & Windus, 1967) pp.24-50を参照。
- (22) L.S., p.62.
- (23) L.S., p.44.
- (24) L.S., p.46.
- (25) L.S., p.90.
- (26) L.S., p.91.
- (27) L.S., p.10.
- (28) L.S., p.65. コールリッジの宗教思想、特に聖書、靈感そして理性などに関する考察では、David, Pym, *The Religious Thought of Samuel Taylor Coleridge* (Colin Smythe, 1978) pp.73-93がある。
『政治家提要』と聖書との関係を論じたものとしては、Owen Barnfield, *What Coleridge Thought* (Oxford, 1971) pp.152-7を参照のこと。